

道徳教育の見直し(2)

足利学校釋奠(せきてん=孔子とその門人をまつる儀式)にて、記念講演(平成16年11月23日)をされた二松学舎学長の石川忠久先生は、足利学校がある足利市の生徒に、論語を教えるべきであると話されました。生涯学習における「まちづくり人づくり」と題して、講演(平成17年2月17日、市民力サ)をされた香川正弘上智大学教授も、同様の話をされました。そして今、市内の小学4年生、中学1年生が毎年、足利学校で論語の素読を行うようになりました。

小学校の創立100周年記念式典(平成16年10月30日、大月小校)で、式場内に展示された「修身」の教科書をたくさん目にしました。目を通すと、今でも色あせない美しい話が載せられていました。青少年を戦争に駆り立てたと思える内容も一部ありましたが、埋もれさせてしまうにはもったいない教科書です。

鎌倉時代に書かれた十訓抄(じっくんしょう=年端もいかないうちにも、人の生き方を教えるとの意図で、教訓となる説話が載せられている)を読みました。国語力がなくて意味がよく分からなかったのですが、その意図は十分に感じることができました。明治の学生の二大図書と言われた西国立志編(もう一つは「学問のすすめ」)を読みました。この本は、明治の学生をどれほど勇躍させたことでしょうか。

現在使用している道徳の教科書は、23(平成21年度からは24項目)の指導内容にある「強い意志」、「人間愛」、「思いやり」、「向上心」、「公德心」といった道徳的価値の追求のために書かれた作り話のような印象をぬぐえません。高校生になって、中学の道徳で何を教わったか分からない、と答えざるを得ないのはこんな所にあると考えています。本県の場合は、道徳の授業にまじめに取り組んでいる方が多いと思います。なのに、栃木の高校生がそのように答えているのです。

道徳の時間に話し合い、いろいろな見方考え方を知ることは大切かもしれませんが、孔子は、学んで思索しないと道理が分からないが、思索しても学ばないのは危険であり、学んで思索しないことよりも悪い、と言っています。(子曰く、^{いわ}学ばざれば則ち^{すなわ}罔し。思い^{くら}て学ばざれば則ち殆し。)

はんにょ 伴侶とするなら

随分前のことですが、中学生が性関係をもつことについて、南米育ちのご婦人に話を聞いたことがあります。「私の国では、未成年は性関係をもつてはならない」ときちんと指導しているとのことでした。未成年とは、自活していない人という意味に取れました。

数年前の新聞ですが、高校3年生の性交体験者は、アメリカと肩を並べる程になったとありました。過去10年間に、アメリカは減少したが、日本では急増した。人種によっても差があるが、白人に限って見れば、女子は完全に抜き去り、そして、何人もの人と性交をしている割合は、アメリカを大きく上回り、顕著な無軌道ぶりを明らかにしていました。市内の中学校では、異性が手をつないで登下校したり、抱き合ったり、まして性関係をもつなどはよくない、としっかり指導していますが、誠に正しいことでもあります。

「遊んでおもしろい子とは結婚するな。良い異性かどうかを判断するには、同性に信頼されているかどうかを見る」と、ある母親は息子に教えました。このように教える親はほとんどいないと思いますが、このことは、息子だけでなく、娘にも言えることだと思えます。

いじめについて(2)

「大人が許されない行為は、子どもでも許されない」という認識が社会に醸成され、いじめたために起きた結果の責任を、加害生徒どころか保護者も追及され、刑事・民事事件として処理されるのは、当然のことであると思います。

いじめを発見しにくいのは、誰にも分かるようないじめが減少し、陰湿化していること、被害者やいじめを知っている周囲の生徒がいじめを訴えないことにあります。被害者には、いじめられていることを知られたくない、訴えればもっといじめられるのではないが、家族にも話せないのは家族に心配をかけたくない、といった心理が働くようです。周囲の生徒は、言えば自分がいじめられることになるのではないが、自分には関係ないこと、といった気持ちがあるのかもしれませんが。

教師としては、なぜ言ってくれないのかという気持ちになるのですが、教師に言えないのは、教師への信頼が失墜(言ったところで黙ってもらえないだろう)していたり、小さかった頃の指導を思い浮かべてしまうのかもしれませんが。「お互いに握手して、これからは仲良くね」といった指導を浮かべていたら言わないでしょう。

優柔不断な教師の対応は、信用失墜行為であると私は考えています。生徒は、教師の対応を見ています。いざという時、「自分を守ってくれる、助けてくれる」かどうかを、日頃の対応から感じ取っているのです。警察の力を信じているから困った時に相談するので、学校だって同じです。

解消の仕方は、教師が気づいた、生徒や保護者から情報がもたらされた、本人が訴えてきた等、いじめが分かったら、全容を静かに調べます。決して情報源を明かさないこと、覺られないように行動します。全容をつかんだら、解消のための方策を立てます。そして、被害生徒に示すのです。これが重要です。「これならばいじめがなくなる」との確信がもてるようにしなくてはなりません。いじめの態様がひどい場合には、解消できない場合も考えて、保護者の意思(被害届を出す意志があるかどうかなど)を確認します。できれば被害届を出す意志を固めてもらっておきます。次に、加害生徒を出校(出塾)停止にする意志を固めておきます。こうしてから、毅然として対応するのです。いじめは呼びかけでなくなるものではありません。決意が大切です。

私は、いじめは人殺しであると考えています。いじめを受けた生徒が自殺したりするからではありません。人には皆、すばらしい面があり能力があります。もてる力を発揮できなくなったり、人間性を歪めてしまう結果を招きます。ですから人殺しです。

善人になるには

何の本だったか思い出せないのですが、「人間の心には、悪い心と良い心が混在している。だから、良い人間になるためには、良い行いを積み重ねることである。そうすれば、悪い心が住めなくなる」と書かれていました。実に単純な言い回しに、感動してしまいました。昔テレビで、「一日一善」と叫ぶ子ども達の姿がしばしば放映(コマーシャルだったか)されたが、毎日は無理でも、何日かに一善はしたいと思っています。「一日一善」ならぬ「一日一悪」が信条と広言した少年がいたそうですが、果たしてどうなったことでしょうか。